

電話連絡の会話におけるスピーチレベルシフト

石崎晶子

要旨

母語話者の談話には、丁寧体と普通体の混在が見られることが指摘されている。しかし、スピーチレベルシフトの生起は、複雑な要因が絡み合い、学習者に習得しにくい項目と言われている。本稿は、母語話者1名が4名のクラスメートに同じ内容を伝える電話連絡の会話を用いることで要因を絞り、スピーチレベルをどのような基準で使い分けているかを検討した。その結果、以下のことが観察された。①伝達者（普通体を基本レベルとする）は伝達の談話において、他より丁寧体を多く使用する。②中核的情報の伝達には直接形丁寧体あるいは間接形丁寧体を、付随的情報には間接形丁寧体を、付加的情報には間接形普通体を用いることが分かった。以上から、伝達者が立場（公的発話か否か）、情報の重みによりスピーチレベルを使い分けていることが示唆される。

【キーワード】スピーチレベルシフト、電話連絡、伝達者、公私の別、情報の重み

1. はじめに

日本語教育では、スピーチレベルの決定、すなわち丁寧体（デス・マス体）と普通体（ダ体）のどちらを使用するかを、聞き手の社会的地位や年齢、聞き手との心的、社会的距離（親疎、ウチ・ソト）、場面（公的・私的）などによって説明することが多い。しかし、話し言葉においても書き言葉においても、1つの談話の中に丁寧体と普通体の混在が見られることが指摘されている（メイナード 1991、国立国語研究所 1992 など）。こうした談話内における丁寧体から普通体へ、あるいは普通体から丁寧体へという移行（以下、スピーチレベルシフト）は、現行場面の認識のしかた、話し手と聞き手のその時々微妙な心的態度の変化、あるいは談話の展開を反映するもので、母語話者はそこにさまざまな言外の意図を読み取る。

しかし、スピーチレベルシフトの生起は、複数の要因が絡み合っていることから、学習者には一見無原則に見えるほどの複雑さを呈する。教室内という限られた空間で、この複雑な事象のすべてを説明することは困難であり、教授項目として取り上げるには、場面と要因を絞り、ある程度単純化せざるをえない。

しかし、単純化されたものであっても、学習者にとって、その例が身近で応用可能なものであれば、日常生活の中で触れるスピーチレベルシフトへの注意を促し、習得のための手がかり、あるいは動機づけとなりうると考える。

本稿は、スピーチレベルシフトを教授項目として扱う際の資料となるよう、要因を絞り、整理された形で、スピーチレベルがどのような条件によって使い分けられているか、どのような言外の意図を伝えるかを記述することを目的とする。

2. 先行研究

何によって母語話者はスピーチレベルを決定するのであろうか。生田・井出(1983)は、次のようなスピーチレベル決定に関するモデルを提示している。①談話を通して主体となる敬語レベルは社会的コンテクストにより決定され、②その制約がさほど強くない場合に話者の心的距離という要因が働き、③次いで談話の論理的構造の展開を示す手段としてのスピーチレベルシフトが起こる。また、宇佐美(1995)は、初対面2者の会話の分析から、丁寧体から普通体へのシフトは、心理的文脈から起こる場合⁽¹⁾と言語的文脈から起こる場合⁽²⁾があることを示している。生田・井出の談話展開と宇佐美の言語的文脈は、内容的に一致するものではないが、スピーチレベルシフトを観察する場合、心理的側面と言語的側面の2面から見ることの必要性を示唆している。

足立(1995)、岡本(1997)は、スピーチレベルシフトがどのような言外の意図を伝えるかという観点からの分析を行っている。足立は、テレビのインタビュー番組をデータとし、丁寧体への移行は客観的な姿勢を、普通体への移行はその発話が情意的であり個人的具体的内容を表すことを示している。岡本は、教室談話の分析から、①現行場面が公的か否か、②発話相手はクラス全体か、個人か、③教師／生徒としての発話か、個人としての発話か、④相手をソトとして扱うか、ウチとして扱うか、という言語使用状況を特定化する機能を持つことを示している。これらは、丁寧体と普通体が混在する談話において、普通体が個人的立場からの私的な発話であることを、丁寧体が公的立場からの発話であることを示す標識となることを示している。

3. データ

本研究でデータとしたのは、40代の大学院生1名がクラスメート4名に電

話連絡を行っている4つの会話である。電話連絡の会話をデータとしたのは、以下の3点による。

- ① 自然な状態で同じ内容の会話が繰り返される。
- ② 音声だけの伝達のため、対面場面より改まった表現が多くなり、話者の基本レベルが普通体である場合には、スピーチレベルシフトの頻度が高くなることが予測される。
- ③ 身振り、表情などの言語外情報を考慮する必要がない。

話者は全て女性で、伝達者である話者 E と受け手である話者 M, R, T, S の計5名である。話者 E との関係は、表1に示すように、話者 M, S とは比較的年齢が近く、話者 R, T はかなり年下になる。話者 R, S とは日常よく話をし、親近感を持っているが、話者 M, T とは話す機会が少なく、やや疎の関係にある。

データとした会話の伝達事項は、以下の3項目である。

連絡1: 修士課程を修了する2年生の送別会の相談について。

連絡2: 留学生相談室の臨時のチューター募集について。

連絡3: 次年度の留学生相談室のチューター募集について。

連絡3は、会話2で受け手である話者 R が連絡網に付け加えて欲しい旨を依頼したもので、会話1にはない。

4つの会話に共通する談話の流れは、図1に示す通りである。開始部で名乗りと挨拶が交わされ、会話2、4では互いの近況を尋ねる談話が入る。連絡網であることが告げられた後、連絡1の伝達事項が伝えられる。会話1、4では

表1 話者

伝達者		受け手	心的距離	伝達事項	時間
E 40代 女性	会話1	M 30代 女性	やや疎	2件	3分22秒
	会話2	R 20代 女性	親	Eから2件、Rから1件	4分59秒
	会話3	T 20代 女性	やや疎	3件	3分58秒
	会話4	S 40代 女性	親	3件	5分45秒

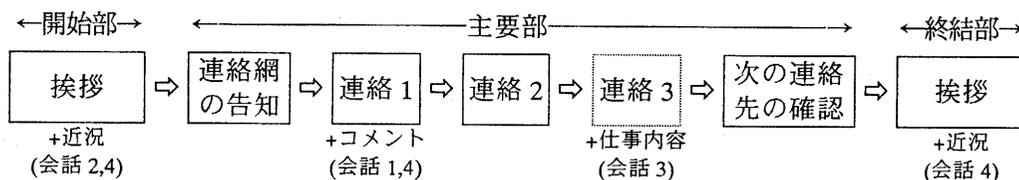


図1 談話の流れ

伝達内容に関連して受け手が個人的コメントを述べ、伝達者がそれに応答するという談話が挿入される。続いて連絡 2、3 が伝えられる。会話 3 では連絡 3 のあとで、チューターの具体的な仕事内容を尋ねる談話が加わる。この後、次の連絡先の確認が行われ、終結部に入る。終結部は、会話 1、2、3 は挨拶のみで終了する。会話 4 では再び個人的な近況を語り合う談話が入り、その後、挨拶を交わして会話が終了する。

電話連絡という言語行動に特有の談話は、連絡網の告知、伝達事項の伝達、次の連絡先の確認に関する部分である。これらをまとめて「用談」、近況、コメント、仕事内容の説明⁹⁾についての談話をまとめて「雑談」とする。

4. 分析の方法

分析の単位として、「発話」という単位を設定した。発話の定義は、ポーズやイントネーションなどの情報を考慮に入れ、意味的・構文的な整合性を持つまとまりとした。肯定の意味を持たない「うん」「ええ」などの相づちは分析から除外した。また、聞き手による割り込み発話があった場合、その前後で構文的整合性が崩れていない発話は 1 発話とした。

スピーチレベルの分類は、先行研究では、丁寧体／普通体の 2 分類をとるもの（生田・井出 1983、岡本 1997、国立国語研究所 1992⁴⁾）、敬体／丁寧体／普通体の 3 分類をとるもの（宇佐美 1995）、尊敬語の有無、丁寧語の有無を組み合わせた 4 分類をとるもの（足立 1995）などがある。仁田（1991）は、丁寧さと敬語性を異なったカテゴリーと捉えている。丁寧さは聞き手が存在しない場合、丁寧体／普通体の分化が存在しないのに対し、敬語性は聞き手の存在を必要としない心内発話にも現れることによる。「あした、いらっしゃる？」のような普通体での敬語使用が可能なことから、次のような図式が成り立つ。

丁寧さ \ 敬語性	+	-
+	いらっしゃいますか	いきますか
-	いらっしゃる？	いく？

本研究では、クラスメート同士の会話であるため、尊敬語の使用例が少ないこと、使用された尊敬語は敬意の表出というより美化語としての使用と解釈できることから、敬語性は取り上げず、丁寧体／普通体の 2 分類をとる。分類の基準は、次の通りである。

丁寧体： 尊敬語、謙譲語、美化語等を含む改まり度の高い発話と、デス・マス体を含む発話。肯定の意図を示す「はい」「ええ」は丁寧体とする。

普通体： ダあるいは動詞、形容詞の終止形で終了する発話、および簡略化された応答（例：連絡網で?）。肯定の意図を示す「うん」は普通体とする。

保留： 聞き手の割り込みなどで中断した発話と、「こんばんは」「どうぞ」のような丁寧体、普通体の区別を持たない表現は保留とした。

5. 会話の基本レベル

1つの談話内で丁寧体と普通体が混用される例は数多く観察されるが、多くの場合そのどちらかを基本レベルとしている。三牧（1996）は、基本レベルからの逸脱がほとんどの場合 1～2 発話で再び元のレベルに戻ることを示している。このことから、スピーチレベルシフトを観察するには、まず話し手の基本レベルがどこにあるかを確認しておくことが必要になる。

表2は、会話全体に占める普通体、丁寧体、保留の発話数とその割合である。話者Eは話者Sに対しては普通体を多く使用している。また、話者M, R, Tに対してはやや普通体が多い程度であるが、丁寧体の中には開始部、終結部における丁寧体の定型表現（例：Mさんですか。Eです。/じゃあ、お願いします。）も含まれていることから、話者Eの基本レベルはいずれに対しても普通体であると考えられる。これに対し、受け手側の話者M, Sは普通体、話者R, Tは丁寧体の使用が多い。話者Eとの関係を見ると、同じクラスメートではあるが、心的距離の点からは話者R, Sとは近く、話者M, Tとはやや疎、年齢的には話者M, Sとは近く、話者R, Tは年下である。従って、心的距離よりも社会的コンテクスト（この場合には年齢）が基本レベルを決定するという生田・井出のモデルに合致している。

表2 スピーチレベルごとの発話数

	伝達者 (E)			受け手		
	普通体	丁寧体	保留	普通体	丁寧体	保留
会話1 (→M)	19 (47%)	14 (35%)	7 (18%)	19 (66%)	5 (17%)	5 (17%)
会話2 (→R)	32 (46%)	24 (34%)	13 (19%)	10 (14%)	43 (59%)	20 (27%)
会話3 (→T)	27 (44%)	24 (39%)	11 (18%)	5 (11%)	30 (68%)	9 (20%)
会話4 (→S)	67 (66%)	17 (17%)	17 (17%)	61 (73%)	16 (19%)	6 (7%)

6. 発話内容とスピーチレベルシフトの関係

図2は、話者Eの用談と雑談での丁寧体と普通体の使用割合を示したものである。用談での丁寧体の使用率は25~63%で、雑談での0~23%と比べ、高くなっている。受け手の基本レベルとの関連を見ると、丁寧体を基本レベルとするT(会話3)に対し最も丁寧体の使用率が高く、次いで普通体のM(会話1)、丁寧体のR(会話2)、普通体のS(会話4)というように、受け手の基本レベルと話者Eの丁寧体への移行の頻度とのあいだに関連は認められない。

図3は会話1,2の連絡1(用談)の部分における話者Eのスピーチレベルの変化を表したものである。丁寧体と普通体が頻繁に入れ替わっていることがわかる。先行研究では、普通体が個人の立場からの発話であることを、丁寧体が公的立場からの発話であることを示す標識となることが示されている。用談において、話者Eのそれぞれの発話がどのような立場からなされたものであるか、話体との関係はどのようにになっているかを、以下において詳しく検討する。

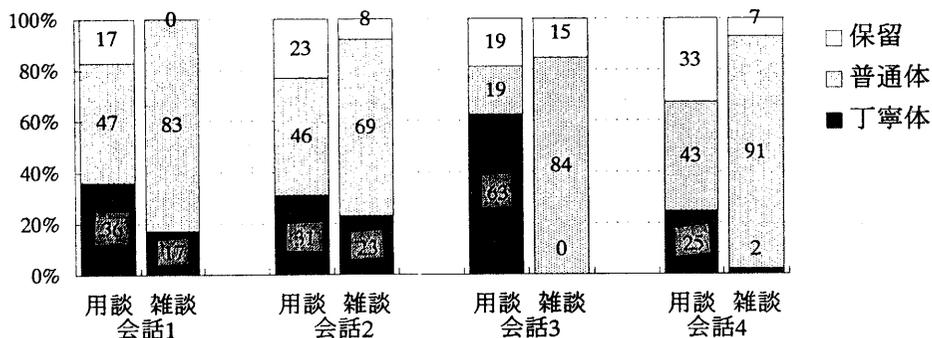


図2 話者Eの丁寧体・普通体の使用割合

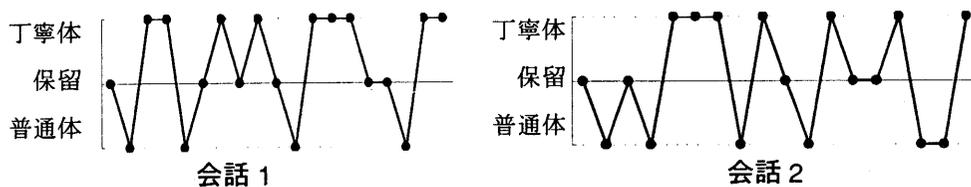


図3 話者Eの連絡1におけるスピーチレベルシフト

7. 用談におけるスピーチレベルシフト

7.1 連絡網の告知

連絡網の告知は、状況を非公式なものから公式のものへ、話し手の立場を個人から伝達者へと変化させるものであり、新たな話題の導入となると考えられる。

会話 1、3 は、開始部での丁寧体による名乗りと挨拶の直後に、会話 2 では以下のような丁寧体での応答に続き、丁寧体で連絡網であることを告げている。

- 会話 2** 1R: なんか町、歩いているだけでも、〔風邪を〕もらってきそうで、
（はあ）もう最近、家からかえ、家に帰ったら、もう手洗いと
うがいは実行してますよ。 } 開始部
2E: あ、ほうとう。（ええ）でもほんとに気をつけてくださいね。
⇒ 3R: はい、ありがとうございます。 } 主要部
⇒ 4E: それで連絡網なんです。（はい）
（ ）内は聞き手の相づち。〔 〕内は筆者による補足

ここでは、3R の「ありがとうございます」という発話によって話に区切りがつけられているため、主要部への移行はスムーズに行われている。

一方、会話 4 では、以下のような流れの中で、普通体により連絡網の告知が行われている。

- 会話 4** 5S: わたしの〔メール〕は入ってた？ } 開始部
6E: あ、あたし全然見てない。なんか（えっ）さい最近あれだから、
見てない。
7S: えっ、あ、そう。
8E: ごめんね。いえ、見るね。
⇒ 9E: それで、ごめん、連絡網なの。（はい）えとね、ちょっと長い
けどあんまり。 } 主要部
10S: ちょっと待って。（はい）（8秒）はい、どうぞ。
⇒ 11E: えとねえ、2月8日の（ええ）修論発表会の後で（ええ）M2
の追い出しコンパをしますっていうこと。
12S: M2の追いだしねえ。
⇒ 13E: うん、それでねえ、例えば去年は…（中略）…いろんな、こう
方法をとったんだけど（ええ）、または場所を変えてもいいそ
うです。

8E までは個人的なやり取りは基本レベルである普通体となっている。9E での連絡網の告知は、普通体で行われ、11E で伝言部分に丁寧体が用いられ、13E に至り文末に丁寧体が現れている。

三牧（1993）、宇佐美（1995）は新たな話題の導入をスピーチレベルシフトの要因として挙げているが、ここではいずれの会話でもスピーチレベルシフトは起こっていない。宇佐美、三牧が話題導入の例として挙げているものは、話し手の滞米経験の話から聞き手の滞米経験の話へ、誕生日プレゼントの贈り主の話からプレゼントの描写へというように、話題の中心は移行するものの話題としての関連性は失われていない。しかし、連絡網の告知は、それまでの話題を完全に打ち切って、話し手と聞き手の立場を、伝達者／被伝達者というまったく新しい枠組みへと移行させるものである。会話 4 の例では、8E までのやりとりで心的距離が近づいているため、9E が丁寧体で発せられた場合、話題的にも心的距離の面でも連続性が失われ、唐突な印象を与えかねない。スピーチレベルを普通体から丁寧体へ段階を追って切り替えることで、私的場面から公的場面への転換が緩やかで自然なものになっている。

7.2 連絡 1～連絡 3

伝達活動において伝達者は 2 つの立場を取りうる。第 1 は、他者から受け取った情報をあたかも自分のものであるかのように扱い、情報の発信者という立場で、言い切りの形で伝えるものである。第 2 は、他者から受け取った情報を取り次ぐ仲介者という立場で、伝聞の形をとる。

神尾（1990）は、情報に対する話し手／聞き手の関わりを次の図のように分類している。

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

A は「私は頭が痛い」のように、話し手の表す情報が聞き手のなわ張りに属していないもので、直接形によって表現される。B は「いい天気ですねえ」のように、情報が話し手、聞き手双方のなわ張りに属するもので、直接形に終助詞「ね」もしくはその変異形を伴った形で表される。C は「君は退屈そうだね」

のように、情報が聞き手のなわ張りに属し、話し手のなわ張りに属さない場合で、間接形に「ね」を加えた形をとる。Dは「明日も暑いらしい」のように、情報が話し手、聞き手どちらのなわ張りにも属さない場合で、間接形で表される。

電話連絡においては、Aが情報の発信者として伝達する場合で、Dが情報の仲介者として伝達する場合に当たる。伝達のための談話で、BあるいはCの聞き手のなわ張りに属する情報が扱われるのは、談話展開上必要な共有知識の喚起、あるいは聞き手への確認を目的とした発話に限られる。上記の図式に従って、発話を分類し、スピーチレベルとの関わりを観察する。

A直接形（話し手のなわ張り内で、聞き手のなわ張りの外）の例

<丁寧体の発話>

会話1 14E: 修論発表会のあとで、M2の追い出しコンパをします。

会話3 15E: 来年の留学生相談室に、あのう、できる人、入れる人はRさんのところに連絡してください。

会話4 16E: もし入れる人がいましたら、Oさんまで連絡してください。

<普通体の発話>

会話1 { 17M: 留学生相談室。2月3日が何時から？
18E: 11時から1時。

会話2 { 19R: 2月3日っていうと、えっと。
20E: 試験の日。

会話4 { 21S: 15日の？
22E: 1時から5時。

上の例から、丁寧体は伝達事項の主要部分を伝えるのに用いられ、普通体は聞き手からの確認要求に答える場合に用いられていることがわかる。話者Eの基本レベルが普通体であるため、丁寧体の使用は公的な立場を示す標識となっている。一方、既に述べられた内容の確認には、伝達者、受け手ともに普通体を使用するケースが多い。特に連絡2では日時の確認に多用されている。宇佐美(1995)は、丁寧体が基本レベルであるとき、このような確認あるいは確認の要求に答える場合の普通体への移行は、発話を簡潔にすることによって、発話の流れを滞らせるのを最小限にとどめる機能を持つと述べている。ここでの普通体の使用は、心的距離を縮めたり、状況を非公式なものにするためのものではなく、会話の流れをとどめないための方略として用いられたものと考えられる。

D 間接形（話し手、聞き手のなわ張りの外）の例

<丁寧体の発話>

- 会話 3 23E: もし、ここに入れる人がありましたら、O さんまで連絡してくださいってことです。
- 会話 1 24E: あした K 先生の授業が終わった後で（ええ）みんなで考えましょうっていうことです。
- 会話 2 25E: その時に、ちょっとしたプレゼントを贈るんだそうです。
- 会話 4 26E: そいでなんか M2 の人から M1 へ記念品があるんだそうです。

<普通体の発話>

- 会話 1 27E: 去年ははなんか、お茶大のマークの入ったハンカチをあげたんだって。
- 会話 3 28E: 去年はなんかお茶のセットとかって言われてた。そういうなんかのセットもらったって。
- 会話 4 29E: ま、辞書なんかもいいんじゃないとかって言われたって。
- 会話 3 { 30T: こちらから希望だしていいんですか？
31E: うん、みたいよ。

D に分類される発話は、28E の 1 例を除き、丁寧体、普通体ともにすべて伝達事項を伝えるものである。それらの内容を観察すると、連絡網で伝える必要のある情報には丁寧体を用いられ、普通体での発話は付加的なものになっている。普通体で述べられた情報は、話者 E が事前に準備したメモには記載されていない。つまり、普通体を使用することで、その発話が連絡網に載せる必要がない私的なものであることを示している。

また、23E と同じ内容が会話 4 では直接形丁寧体で伝えられている。しかし、24E、25E、26E のような中心事項に付随する情報には、いずれの会話でも、直接形丁寧体を用いていない。つまり、図 3 に示すように、直接形丁寧体は伝達事項の核となる部分にのみ用い、間接形丁寧体での伝達は中核の情報およびそれに付随する情報を、間接形普通体は中心部分を外れた付加的情報を伝えるという構造になっている。

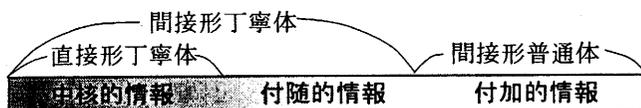


図 3 伝達事項を伝える発話での話体の使い分け

B 直接ね形（話し手、聞き手のなわ張りの内）の例

会話 1 32E: 仕出屋さんみたいなお弁当屋さんにとのんだじゃない。

会話 1 33E: なんか去年は、なんか、お茶のセット、あそこにコーヒーとかあるじゃない？

会話 3 34E: あそこにコーヒーとかあるじゃない？

聞き手のなわ張りの属する情報を述べた発話は、上記の 3 例のみで、すべて普通体が用いられている。これらは共通知識の確認を行い、次に続く発話を理解しやすくするためのものである。普通体の使用により、聞き手と同一の立場、共通性が強調されている。

C の間接ね形（話し手のなわ張りの外、聞き手のなわ張りの内）に属する発話は今回のデータには見られなかった。

7.3 次の連絡先の確認

次の連絡先の確認は、伝達者と受け手の話し合いの中で確認する場合（会話 1、会話 2-2⁽⁵⁾）と、伝達者が指示する場合（会話 2-1、会話 3、会話 4）がある。前者では普通体、後者では丁寧体の使用が多くなっている。

会話 1 35M: あ、〔この連絡〕 O さんから来たのかな。

⇒ 36E: あ、そうだ。M さんの後って Y さんなんだ。

37M: うん。

⇒ 38E: じゃあ、わたし Y さんにちょっとジェットのことで用事があるから、あたしもう一度かける。

会話 3 39T: あ、はい。じゃあ、えーと、これは、

⇒ 40E: えっとねえ、C さんに流してください。それで C さんにストップしてもらって、あたし、あの、あ、

41T: え、N さんには流さなくていいん [ですか？]

42E: あ、じゃあ、ちょっと S さんに用事があるので（ええ）、あの、じゃ、N さんまで C さんに流してもらったら、

43T: あ、そうですか（はい）。で、N さんで止めていいんですね。

⇒ 44E: N さんで止めていいです。

会話 1 の 35M は、連絡 2 の中に出てきた O の名前から、連絡網がどのような経路で流れてきたかを確認しているものである。この発話から、話者 E は話者 M が次の連絡先を確認しようとしているのだと解釈し、36E、38E で自分の都合で次の連絡を代行する旨を伝えている。普通体の使用のより、個人的立

場からの申し出であることを示している。

それに対し、会話 3 の 39T は伝達事項を受け取った後、次の連絡先の指示を要求するもので、40E、44E で与えられた指示は丁寧体をとっている。年齢差はあるものの、クラスメートという同じ立場にあるものが、個人レベルで一方的な指示を与えるということは少ない。丁寧体の使用により、指示が個人的要請によるものではなく、伝達者としての公的立場から行われたものであることを示している。

8. まとめと今後の課題

普通体を基本レベルとする話者が、クラスメートに電話連絡を行う会話において、以下のことが観察された。

スピーチレベルをどのように使い分けているかという点では、

- ① 伝達の談話では他より丁寧体の使用が多くなる。
- ② 情報の重みにより直接形丁寧体、間接形丁寧体、間接形普通体を使い分ける。
- ③ 指示を出す場合には、丁寧形が用いられることが多い。
- ④ 確認のための応答には、普通体が多く用いられる。
- ⑤ 共有知識の喚起には、普通形が用いられる。

スピーチレベルシフトが伝える言外の意図としては、

- ① 丁寧体の使用が情報の重要性を、普通体の使用が情報が付加的なものであることを示す。
- ② 丁寧体を使用することで、その発話が伝達者としての公的な立場からなされたものであることを、普通体を使用することで、その発話が個人的な立場からなされたものであることを示す。

今回のデータに見られた特徴が一般化可能なものであるかは、今後データを増やし検証していかなければならない。しかし、スピーチレベルの使い分けの指導は、ある発話においてどの形式を取るのが正しいかを教えるのではなく、ある形式を取った場合、どのような効果があるかを理解し、日常生活で触れるスピーチレベルの使い分けに対する観察眼を養うことであると考えられる。従って、今回のデータを1つの例として、観察の視点を提示することは十分に教育的意義があると考えられる。教材としての体裁を整え、授業に供する中で教育効果を検証することを今後の課題とする。

【注】

- (1) 心的距離の短縮と相手の普通体の発話に合わせるときの2種類を挙げている。
- (2) ひとりごとあるいは自問するような発話、確認のための質問あるいはそれに対する答え、中途終了型発話の3種類を挙げている。
- (3) 仕事内容についての談話を雑談としたのは、元々の伝達事項に含まれていなかったため、話者Eが自分がチューターをしたときの個人的体験を基に説明していることによる。
- (4) 丁寧体、普通体のほかに、使用制限が大きいものの軽卑体（ヤガルなど）の存在を指摘している。丁寧体は、さらに特別丁寧体（デゴザイマス）と標準丁寧体（デス・マス）に下位分類している。
- (5) 会話2では、連絡2の後で次の連絡先の確認が行われ(2-1)、その後受け手Rから連絡3の追加要請があり、それが終了した後再度次の連絡先の確認が行われている(2-2)。

【参考文献】

- 足立さゆり（1995）「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』第5号, pp73-87
- 生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12-12, 大修館, pp.77-84
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用 —スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第662, 昭和女子大学近代文学研究所
- 岡本能里子（1997）「教室談話における文体シフトの指標的機能 —丁寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』Vol.16
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館
- 国立国語研究所（1992）『日本語教育指導参考書18 敬語教育の基本問題（下）』
- メイナード.K.泉子（1991）「文体の意味—ダ体と丁寧体の混用について—」『月刊言語』第20、巻2月号, pp75-80
- 仁田義雄（1991）「言語態度の要素としての〈丁寧さ〉」『日本語学』Vol.10、2月号、明治書院
- 三牧陽子（1993）「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第I部門』第42巻, 第1号, pp.39-51
- _____（1996）「待遇レベル・シフト」『言語探求の領域 小泉保博士古希記念論集』大学書院

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻）